

制度主義者たちと古典派経済理論

佐々木 晃 著

東洋経済新報社

著者紹介

略歴 1924年 横浜市に生まれる
1949年 日本大学法文学部を経て
日本大学経済学部卒業
1960年 日本大学経済学部教授
1969年 アメリカのコロンビア大学に留
学
現在 日本大学経済学部教授、経済学博士
著書 『経済学の方法論—ヴェブレンとマルク
ス—』(東洋経済新報社)
『〔増補〕価値論の方法論的諸問題』(日本
評論社)
『経済学方法論の課題』(評論社)
『〔増補〕制度派経済学者たちとアダム・
スミス』(日本大学経済学部書籍部)
現住所 川崎市多摩区王禅寺708番地64

制度主義者たちと古典派経済理論

定価 2600 円

昭和57年 4月22日 第1刷発行

昭和59年 2月20日 第2刷発行

著者 佐々木 晃

発行者 高柳 弘

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話03(270)4111(大代表) 振替口座東京3-6518

© 1982 <換印省略> 落丁・乱丁本はお取替えいたします。 3033-3262-5214
Printed in Japan

序 言

制度派経済学は、ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929) および彼の伝統のなかで活動する他の経済学者たちの著作に由来する、きわめてアメリカ的な知的所産であるといえよう。⁽¹⁾ もともと「制度派経済学」という言葉の最初の使用は、ジョセフ・ドーフマン (Joseph Dorfman) によれば、ウォールトン・H・ハミルトン (Walton H. Hamilton) が一九一六年十一月刊行の『政治経済学雑誌』に発表した論文においてであった。⁽²⁾ そしてアメリカ合衆国において制度主義という名称は、一九二〇年代および三〇年代に広範な流行を獲得するに至ったといわれている。

ところでポール・T・ホーマン (Paul T. Homan) は、制度主義を標榜する学派の存在を否定しているが、またアーサー・K・デイヴィス (Arthur K. Davis) も、ヴェブレンはいかなる学派も創設しなかったとして、彼を制度派経済学者たちの集団に入れることに反対している。しかしながら、ウェズレー・C・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell, 1874-1948) は、ジョン・R・コモンズ (John Rogers Commons, 1862-1945) を「ヴェブレンとの違いを認めながらも同じく制度主義に含めている。ドーフマン、フラン・G・グルーチャー (Allan G. Gruchy) およびヤコブ・オーサー (Jacob Oser) らは、ヴェブレンおよび彼の流れを酌む経済学者たちを制度学派として捉えていることも確かである。とりわけ一九五七年のアメリカ経済学会大会の動向は、制度主義に基づく一群の知的運動を容認する

ものである。

制度学派の概念は、グルーナーが指摘しているように、この学派の成員たちが同じ哲学的な方針の決定、同じ経済学研究のための広範な文化的アプローチ、および同じアメリカ経済体制考察の方法を持つという意味において、たゞきわめて緩やかに用いることができる。⁽³⁾そしてこの制度学派の建設者たちの影響は、第二次世界大戦後、以前にも増して顕著なものとなってきた。とりわけ正統派経済学の危機が叫ばれてから、制度派経済学に対する関心は、いぢだんと高まってきた。

ヴェブレンはその独自の経済学体系を樹立するに当たり、それまでの伝統的な経済学に対して、きわめて特色のある批判を加えている。かくしてヴェブレンの時代から以後経済学者たちは、それらの著作の基礎になっている先入観の意義、および人間性についてのそれらの仮定の限界、および経済体制の性質について、いっそう気づいた。⁽⁴⁾またヴェブレンの伝統のなかで活動する制度主義者たちのアプローチは、近年においてとくに低開発諸国の研究にいちじるしい成果を挙げた。彼らは、多くの社会諸科学の観点から研究を進めるから、対象を最も具体的に捕捉することができた。それゆゑに制度派経済学は、また社会諸科学に対する総合的なアプローチにかかわる学者たちに、興味を起こさせた。

本書において私は、このような観点を考慮に入れて、ヴェブレン、ミッチェル、およびコモンズらによる古典派経済理論の批判的研究を取り上げる。もっとも、ヴェブレンらがこの伝統的な経済理論を批判したのは、それだけの理由があつた。彼らの思想の成長期は、南北戦争以後の近代資本主義の急速な発展期でもあつた。当時、アメリカの大多数の専門的な経済学者たちのあいだで、古典派経済学はなお圧倒的な勢力を保っていた。そしてアダム・スミスやリカードの学説に由来する「自由放任主義」は、依然として政府の支持を得ていた。けれども、一八七〇—八

○年代を通じてアメリカ資本主義は、独占、貧困、不況などの諸問題を生み出していた。古典派経済理論に対する反省から、限界主義者の学説も台頭してきた。かくしてヴェブレンらの制度主義者たちは、いまや時代遅れとなった古典派経済理論および追隨学説を、その基本思想から徹底的に批判して、経済学を再建すべき時に近づいていたといえよう。⁽⁵⁾ところで、これらの三人の制度主義者たちの研究には、いまなお貴重な学問的業績が含まれている。そこには彼らの哲学的訓練から生じた独特の攻撃手法が認められるし、またその固有な制度主義の考え方も窺知することができる。本書において私の主要課題は、これらの点の究明にあるといえよう。

さらに、これらの制度主義者たちの研究には、彼ら相互の考え方のうちに共通点ばかりでなく、また相違点が認められる。それゆえに、このような諸点を究明して制度派経済学の発展の解明に一步近づくことが、この研究の目的である。

ところで本書は、昨年七月に原稿の大部分ができ上がり、東洋経済新報社から上梓されることに決まった。私がその知らせを受けた時、妻の和子は心から祝ってくれた。それからほどなく九月五日の夜半、突然彼女は病を得て天に召された。彼女の生涯は、ゲーテの詩「見出しぬ」(Gefunden)の、「木かげに、花ひとつと／星のごと輝きつ、／つづらなる瞳のごと美わしく／咲ける……」⁽⁶⁾を、彷彿とさせるものであった。その後、幾たびか脳裡に残る彼女の声に励まされて、私はこの書物の公刊にこぎ着けることができた。それゆえ私は本書を、何よりもまず在天の彼女に捧げたい。

また本書を公刊するに当たっては、その上梓を快く引き受けていただいた東洋経済新報社、そのさい格別のご尽力をいただいた同社の山口 正氏、佐藤幸千賀氏、および種々お世話になった友人の森 俊雄氏に、厚くお礼を申し上げます。

- (1) Allan G. Gruchy, "The Institutional School," *International Encyclopedia of the Social Sciences* (New York: The Macmillan Co. & the Free Press, 1968), Vol. 4, p. 462.
- (2) Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization* (New York: The Viking Press, 1959), Vols. IV and V 1918—1933, p. 353.
- (3) Allan G. Gruchy, *op. cit.*, p. 462.
- (4) *Ibid.*, p. 466.
- (5) ショーペン・ドーファンは、ヴェーバーの古典派經濟理論批判の時代的背景について、次の論文のなかで概説している。
——Joseph Dorfman, "Background of Veblen's Thought," *Thorstein Veblen* (New York & London: Columbia University Press, 1968), pp. 106-130; Joseph Dorfman, "The Background of Institutional Economics," *Institutional Economics: Veblen, Commons, and Mitchell Reconsidered* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1964) pp. 1-44.
- (6) ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の詩 *Gefunden* からの引用に当たっては、高橋健二氏の優れた邦訳に負うた。——『ゲーテ詩集』新潮文庫、昭和五十八年一月、二〇二ページ。

一九八二年二月十日

佐々木 晃

目次

序言

第一章 制度学派の建設者たちの諸見解	1
--------------------	---

第一節 制度派経済学者たちの古典派経済理論の批判	1
--------------------------	---

第二節 ヤコブ・オーサーの制度学派についての見解	7
--------------------------	---

第二章 ヴェブレンのアダム・スミス経済理論の批判	15
--------------------------	----

第一節 基本的な先入観と価値論および価格論	15
-----------------------	----

第二節 「推測的歴史」と貨幣問題	24
------------------	----

第三節 正規の人間性の概念	27
---------------	----

第四節 ヴェブレンの見地	31
--------------	----

第三章 J・R・コモンズのアダム・スミス経済理論の批判	35
-----------------------------	----

第一節	アメリカの制度主義とコモンズの経済学体系	35
第二節	十八世紀イギリスの慣習法とスミスの資本家的経済体制論	40
第三節	スミスにおける政府の役割とそれに対する諸個人の自由と財産	51
第四節	スミス経済理論の批判と制度経済学の方法論	63
第四章	W・C・ミッチェルとアダム・スミス経済理論の類型	69
第一節	ヴェブレンの伝統とミッチェルの経済学体系	69
第二節	十八世紀イギリス人の習慣とスミスの人間性の概念	76
第三節	スミス経済理論の背景にある個人率先的大量現象	93
第四節	制度主義的な考え方とスミスの人間性の概念	102
第五章	制度派経済学者たちとジェレミー・ベントム	107
第一節	W・C・ミッチェルのベントム研究	107
第二節	ベントム功利主義思想台頭の時代的背景	110
第三節	ベントムの快楽主義心理学における人間性の概念	115
第四節	ベントムにおける人間性の概念の限界	124

第六章 W・C・ミッチェルとトマス・ロバート・マルサス……………133

第一節 ミッチェルのマルサス理論の研究……………133

第二節 マルサス『人口の原理』刊行の経緯……………136

第三節 『人口の原理』における基礎的仮定……………140

第四節 マルサスの人間性の概念……………146

第七章 リカード経済学の方法論……………151

第一節 リカード経済学の伝統……………151

第二節 リカードの価値、分配、および成長の理論……………155

第三節 リカード経済学の方法論……………168

第四節 リカードと制度派経済学者たち……………176

第五節 ファリス・ディーンの所説……………188

附 録 一

アダム・スミスの生涯と著作……………195

一 生 涯……………195

第一章 制度学派の建設者たちの諸見解

第一節 制度派経済学者たちの古典派経済理論の批判

二十世紀初頭において、制度学派は経済思想に対する顕著なアメリカの貢献を示すものとして好運な初舞台を飾った。この学派の建設者たる三人の偉大な人物は、ソースタイン・ヴェブレン、ジョン・R・コモンズ、およびウェズレー・C・ミッチェルであった。彼らの理論体系は、伝統的な経済理論に対する批判的な態度において、ある点でドイツ歴史学派のそれと類似性を持っていた。⁽¹⁾ それゆえ制度学派の台頭は、アメリカにおいてこれらのドイツ流の精神あるいは教養を身につけた経済学者たちのグループを、とくに感動させることになった。

しかしながらヤコブ・オーサーのように、制度学派はドイツ歴史学派とのあいだの「とくに方法論における一定の類似性にもかかわらず」、前者は「国家主義的ではないし、またそれはその見解においていっそう自由主義的で民主主義的である」、という見方も存在する。⁽²⁾ 制度派経済学者たちの問題の取り上げ方は、哲学や政治的イデオロギーの点でアメリカの傾向と調和していたし、その新しい原理は、差し迫った経済的および社会的な必要に適用することができた。

ここで私は、制度学派が台頭してきた当時の社会的背景について、簡単に触れておこうと思う。周知のように、南

北戦争（一八六一—一六五年）と第一次世界大戦（一九一四—一八一年）とのあいだの期間において、アメリカ資本主義の成功は、際立ったものであった。迅速な成長は、世界における最も巨大かつ強力な産業組織を作り上げた。しかしながら、最低所得層の生活水準の上昇は、国民所得の上昇と歩調を合わせなかったし、大多数の賃金取得者たちの生活条件の改善は、遅々として進まなかった。そのうえヨーロッパ諸国からアメリカへの大量の移民は、賃金水準の根底を削り去る傾向があったし、循環する不況は、しばしば賃仕事から離れた人々を荒廃させた。

かくして一八七〇年代からアメリカ資本主義は独占の時代に入った。そしてこうした動きは、大企業に経済的および政治的な力の優位を与える世紀の転機をめぐって早まった。ことに一八七三年と一八八四年の恐慌のあいだにも、生産と資本の集積・集中は急激に促進された。一八八二年にはスタンダード石油トラストが出現し、そして八〇年代にはこの独占形態が多数の工業部門でもみられた。しかも保守的な意見は、知識階級や政府において優勢であり、労働者の利益に関して自由放任主義を宣言した国家および連邦政府は、激化する産業的紛争において労働階級に対する十分な理解を示さなかった。とりわけ政府高官の無抵抗、無関心、および保守主義のために、一八八七年のブルーを禁止した州際商業法、および一八九〇年のシャーマン反トラスト法は実施されなかった。そのうえ政府の政策は、自然資源の不経済な利用を容認すらしていた。一八九〇年代初期の頃から、新しい独占形態である持株会社が生み出されたばかりでなく、トラストの形成は九〇年代には一五七に上っている。

それゆえに、ヤコブ・オースーは、このような事態に関連して次のように指摘している。

「十九世紀末のアメリカの政治的および経済的な環境は、正統派限界主義者の学説をますます不満足に思う経済学者たちを生んだ。社会主義者たちのほかに、最も優勢な学派の仮定、分析、および結論を否認する多少の『相当な地位』、あるいはやや相当な地位の専門職業の経済学者たちが存在した。限界主義者たちの仮設事項は、ますます非

現実的であるように思われた。……そこには独占、貧困、不況および浪費についての懸念が増大しつつあった。近代資本主義の作用は、伝統的な経済学的理論づけに基づいた予言に一致しなかった。社会的統制および改革のための運動は、勢いを次第に増しつつあった。そして制度派経済学が発達したのは、このような環境においてであった。⁽¹⁾

ところで、ヴェブレンは、伝統的な経済学に対抗する新しい運動の先駆として現われ、そして新しい経済学が二十世紀の前半に採るべきであった道程を広範囲にわたる概説で計画している。しかも彼の思想は、アメリカにおけるニュー・ディールの考え方の一つの先蹤をなすにいたっている。したがってヴェブレンの思想はアメリカ精神史上の転機をもたらしたものととして、その研究はその後の合衆国における思想界の動向を理解してゆくうえで、一つの重要なカギを提供するものと考えられる。

またコモンスは、一般にはアメリカプラグマティズム学派に属するとみなされてきたが、彼は経済的な進歩および社会的福祉を実現するための手段として、経済学上の研究題目を考察した。それゆえに、彼の体系は「集団行動」に対する指針を示すときにその最高潮に到達した。彼の方法がいちばんはつきりと現われているのは、資本主義をその法的な基礎から説明した場合であって、この基礎のうえに、彼および彼の学派はアメリカの労働運動史に不滅の業績を残した。彼もまたヴェブレンに劣らず、ニュー・ディールの先駆者の一人として偉大な改革者となった。

そしてミッチェルは、ヴェブレンの最も輝かしい教え子として、合衆国における計量経済学の傑出した代表的な人物とされている。とりわけ彼の景気循環の分野における先駆的著作は、その広い理論的諸見解に多くの卓越性を与えているといえよう。それはアメリカ経済学史上画期的な事件とされ、いくらこれを賞賛してもしすぎることはないとするにわれている。

したがって、これらの制度派経済学者たちに対する研究は、枚舉にいとまのない程多くみうけられる。もっともそ

の場合に、制度派経済学は一九二〇年代を最盛期として、三〇年代以降は、衰微したようにみえたが、それにもかかわらず、アメリカの学界にはその後もなおこの学派の経済学者たちに対する研究は、根強く進められているといえよう。いまそのうちの主なものを挙げれば、たとえば、ウエズレー・C・ミッチェル自身をはじめとして、ポール・T・ホームマン、リチャード・V・テガート(Richard V. Teggart)、『ジョゼフ・ドーフマン、ジョン・A・ホブソン(John A. Hobson)』、ケネス・H・パースンズ(Kenneth H. Parsons)、『マックス・ラーナー(Max Lerner)』、フラン・G・グルーチー、デイヴィッド・ハミルトン(David Hamilton)、『デイヴィッド・リースマン(David Riesman)』、レヴ・E・ドブリアンスキー(Lev E. Dobriansky)、『ラファイエット・G・ハーター(Lafayette G. Hartar)』、およびダグラス・F・ダウド(Douglas F. Dowd)などの人々によるすぐれた解説や研究がある。⁽⁵⁾ いずれにしても、最近の諸研究には、経済学の方法論に対する強い関心が示されている、といえるであろう。

ひるがえって、前述の三人の制度派経済学者たちは、等しく伝統的な経済学に対する批判を通じて、独自の経済学を樹立している。彼らは、従来の経済学を前ダーウィン主義のものとみなし、そして自分たちのそれをダーウィン主義のものと主張している。彼らの進化論的経済学は、制度の変化を説明するものでなければならぬ。そこで彼らの伝統的な経済学に対する批判は、当然、制度をめぐる人間性の概念を中心に論議されることとなる。そこで私は、このような観点からウェブレン、コモنز、およびミッチェルらがまずもってアダム・スミスやその他の古典派の経済理論に対して、どのような批判的見解を抱懷したか、そしてそれらの経済理論の本質と限界とをどのように解明したか、というような問題を取り上げて吟味してみようと思う。のちにみるように、このような問題についての考察は、制度派経済学者たちの包括的な経済学説に対する企図やすぐれた歴史的感覚に基づいた見解が、最もよく解明される。そのうえ、個々の制度派経済学者たちのあいだの考え方の共通点ばかりでなく、また、相違点をも明らかにする

という意義がある、といえよう。いうまでもなく、ウェブレンの思想の伝統は、大きなわく組みにおいてその弟子たちに継承されているけれども、そのままの形態で必ずしも継承されているとはいえず、むしろそれらのあいだに若干の相違点が認められる。そしてこうした点を明確にすることは、制度派経済学の発展を説明するうえで一つの重要な理論的価値を持つものといえよう。私が制度派経済学者たちの古典派経済理論の批判を取り上げたのは、このような考えからである。

そこで私は、このような問題の究明のために、主として次の諸著作を順次考察してみることとする。すなわち、それはウェブレンの『近代文明における科学の地位』(*The Place of Science in Modern Civilization, and Other Essays*, 1919)^{*} コモンズの『制度経済学』(*Institutional Economics: Its Place in Political Economy*, 1934)^{*} 『集団行動の経済学』(*The Economics of Collective Action*, 1950)^{*} ハーシュバチェルの『経済理論の諸類型』(*Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*, Vols. I-II, 1967-1969) などである。⁽⁷⁾

(1) ヘンリー・W・スピーゲルは、その著『経済思想の成長』のなかで次のように述べている。「制度派経済学者たちは、ドイツ歴史派経済学者たちに特有な伝統的経済理論に対する批判的な態度を共有しているし、またドイツ歴史派経済学者たちの見解は、彼らの以前の研究者たちが合衆国への帰朝後に普及された。制度派経済学とドイツ歴史派経済学とのあいだの連絡は、とくにコモンズによって言明されたし、また彼はドイツの問題の取り上げ方に対する自分の教師のイリー(Richard Theodore Ely)の愛着を共有するようになった。三人の主な制度派経済学者のうち、ミッチェルだけはドイツに学生としてある時期をすごした。しかし彼は、オーストラリアにも行ったが、どちらの経験も彼の将来の仕事に深い影響を及ぼしたように思われる。」⁽⁸⁾ Henry William Spiegel, *The Growth of Economic Thought* (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1971), p. 628. また同様な点について、ヤコブ・オーサーは、その著『経済思想の進化』において次のように指摘している。「アメリカの制度主義者についてのドイツ歴史学派の影響は、至極明らかである。アメリカ経済学会(American Economic Association)の創設者たちの最多数は、ドイツの運動とその方法論に通じていたし、また好意的であった。ソースタイン・ウェブレンの有名な

教師たちのある者は、ドイツで学んだことがある。」Jacob Oser, *The Evolution of Economic Thought* (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1963), pp. 330-331.

(2) ヤコブ・オーサーは、同上書において次のように述べている。「しかしながら、われわれはドイツの歴史学派とアメリカの制度主義とのあいだの方法論における一定の類似性にもかかわらず、後者は国家主義的ではないし、またそれはその見解において、いっそう自由主義的で民主主義的であるということに注意すべきである。」(*Ibid.*, p. 331.)

(3) ヘンリー・W・スピーゲルは、前掲書のなかで次のように指摘している。「ある程度まで、制度派経済学は、歴史派経済学に対する片われを形づくった。しかしそれは、そのアメリカのプラグマティズムの哲学との結合によってそれに与えられたそれ自身の独自の特徴をもった個性的にアメリカの運動であった。ウェブレンは、チャールズ・サンダーズ・バース(Charles Sanders Peirce)の学生であった」¹⁾。またジョン・デューイ(John Dewey)の同僚であった。バース、デューイ、およびウィリアム・ジェームズ(William James)は、プラグマティズムのすぐれた代表的人物であった。ミッチェルはウェブレンおよびデューイの双方の学生であった。偉大なプラグマティストたちとロモンズとのあいだのこのような個人的な連絡は存在しない。しかし、プラグマティストたちによって起こされた思想の流れは、それら自身、ロモンズの著作のなかにもまた感知される。」Henry W. Spiegel, *op. cit.*, pp. 628-629.

(4) Jacob Oser, *op. cit.*, p. 330.

(5) 最近「再び制度派経済学が」ジョン・K・ガルブレith(John Kenneth Galbraith)「グナール・シュルダール(Gunnar Myrdal)の顕著な活躍によって新たな進展をみている。」

(6) Wesley C. Mitchell, "Commons on *The Legal Foundations of Capitalism*," *American Economic Review*, Vol. XIV, No. 2, June, 1924; Wesley C. Mitchell, "Commons on Institutional Economics," *American Economic Review*, Vol. XXV, No. 4, December, 1935; Wesley C. Mitchell, *Lecture Notes on Types of Economic Theory* (New York: Books for Libraries Press, Inc., 1928); Richard V. Teggart, "Thorstein Veblen, A Chapter in American Economic Thought," *Publications in Economics*, Vol. II, No. 1 (Berkeley, University of California Press, 1932); Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and His America* (New York: The Viking Press, Inc., 1934); John A. Hobson, *Veblen* (London: